

「觀海者難爲水」——印から書への連係——

河野 隆（鷹之）

Takashi (Yoshi) Kawano

呉讓之は書・画・篆刻を善くした人として知られる。弱年包世臣に師事し、書法・書学を深く学び、包師も強い期待をもって聡明で

られ、自然体から醸し出される濃しほかな情感は余人の到り得ない境界を示している。

資質に恵まれた若き呉讓之を懇切に指授している。包師は楷・行・草は自らの法を伝授し、一画を気で満ちみちた独自の筆法を習得させる。篆・隸・篆刻は当代第一と神品に品等した鄧石如を目標に設定して、その法を忠実に追究させた。呉讓之はタイプの異なる鄧包二人の法を、我を抑えて見事に吸収し消化する。この法を学ぶ基本的なスタンスに呉讓之ならではの特質が存するのだが、古法を学ぶ時、最初から強烈な個性で対象を自分サイドに引きずり込んで対応する趙之謙や呉昌碩のような態度とは大きな隔りがある。呉讓之は没我の姿勢で貫かれ、趙之謙・呉昌碩は自尊の構えが濃厚である。自我の主張をせず、謙虚に対象に迫る呉讓之だが、剛毅渾朴な風格の鄧石如や、濃厚で粘液質の底知れぬ深淵を思わせる包世臣の趣きとは本質的に距離がある。呉讓之は滋味を湛えて清らかな風趣が認め



筆者は篆書の筆法を習得しようと第一に手掛けたのは楊沂孫の『龐公傳』、次に呉昌碩の『臨石鼓文』（林少東氏本）に取り組んだ。三番目に呉讓之の『宋武帝勅』を二十八歳の時、約一年をかけて精習したことを想い出す。『宋武帝勅』は白紅社刊の折本仕立てのテキストに依ったが、伸びやかで張りのある線条の表現に苦勞した。上から下に伸びる画の微妙な弧を描くふくらみや、収筆で画中央から筆鋒が抜き出される中鋒のこなし方、分間の完璧な調整と緊密な結構などそう簡単には身に付かず、半紙で四字を五十枚百枚と書き込んでようやく体をなしたことを今は懐かしく振り返って、若き日の傾倒を想い起こしている。『宋武帝直』は武帝が太子時代の一文だということで、『宋劉裕與藏書』とすべきだとの他家解説を読んだって知ったのは大分後のことである。呉讓之の篆書作は相当数あり、

百字前後の多字数大作も数種ある中で、この『宋武帝勅』は呉氏の最高の傑作だと確信する。河井荃廬翁の愛蔵品の一つだったが、昭和二十年三月十日の大空襲で灰燼に帰したことは非常に惜しまれる。

これらの初期の臨書歴を経て、胡澍・趙之謙・鄧石如・徐三庚・呉大澂・羅振玉等の清朝諸名家の遍歴を経て、わが邦の二世中村蘭台・西川寧先生の篆書冊なども必至に喰い下がったことがあり、筆者の篆書の筆法が形成されたと思う。理解しやすい清朝諸名家のテキストを基に進め、泰山や瑯邪台の刻石類や金文への挑戦は四十年代に入ってからである。清朝金石家・近現代の名家から秦篆の大元へ遡源したのだが、自学自習の取り組みだった私のこの方法は、技法の理解と習得の道筋としては妥当だったと思っている。篆書を初めて学ぶ時にいきなり泰山刻石や西周の金文に飛びついても大抵の場合には消化できず、途方に暮れるか、早々に諦めてしまう人が多いようだ。

四十七歳の時に、大学の篆書・篆刻の講座や社会人教育で篆書の基礎を指導する時の教材として『篆書の基礎学習』という小冊子を自費出版したことは、篆書の歴史や技法習得の方法を自分なりに再確認する良い機会となった。このテキストは説文建首五四〇部中から康熙字典で用いられている部首二一四種を抽出し、説文に無い五種は造字して再編成したものである。一画の「一」から十七画の

「勅」へと徐々に複雑化するのだが、初学の人でも習い易く、二一四部を理解すれば、篆書を読解する時の第一の素養ともなりうるものである。

さて、今回の研究作だが、呉讓之の三十四歳所刻印である「孟子語六字印」を対象とした。この印は現在制作年が特定できる最年少の篆刻作品で、呉讓之得意の小篆を入印して苦もなくまとめ上げ、爽やかに奏刀したもので、呉氏の代表作に挙げられる。この印は印側・印頂の五面にわたって百余字の草書款が刻入されており、包師に対する敬慕の念のこもった、特別思い入れの強い印である。また、この語は呉讓之の意に合った題材で、生涯にわたり朱白大小に五種制作しているのを見ても取り組みが尋常でない作と言える。この刻印を筆で摸して、小品の書作品としてみようと思作したのが今次の制作意図である。伸びやかな細めの線条を駆使して、規矩の整った秀潤な趣きに仕上げようとした。すっきりとした刀痕の篆刻作品から、その結体・章法を基本的には極力生かして取り込もうとした。ただ、「觀」字の偏上部は「」となっているが、これは私淑した鄧石如の誤りをそのまま踏襲するものである。説文篆文に照らしてみても「」とすべき誤写なので修正を加えた。清朝名家の中にはこうした誤りが時々あるので、鵜呑みにしないで不審な点は確認する習慣をつけなければならない。

今回、呉讓之の印から篆書作へと転換を試みたが、呉讓之はやはりうまいものだ実感した。西川寧先生が『猗園雜纂』の「呉讓之札記」の中で述べている「…その極く平正な、何の変哲もない処に、どこか行いすました安心がある」という指摘は、呉讓之の諸芸の本質を見事に表現し得ていると改めて思うのである。

印から書、書から印への連係は以前から度々トライして来たが、新しい発見もあり、また興味深い題材との出遇いに期待し、連係を深めようと強く自覚した次第である。

題材 「觀海者難爲水」——孟子——

落款 讓翁卅四歲所刻孟子語印。鄧派

朱文中最清爽者。乙未冬日鷹之。

サイズ 縦二七×横三四cm

落款印 「隆印」六分角半通白文印

筆 「晨風清賞」

墨 「杉影」墨運堂製

紙 「紅星牌棉料夾宣」

印泥 「箭鏃」上海西泠印社



27 × 34cm

觀海者難為水
讓翁卅四歲所刻孟子語印。鄧派
朱文中最清爽者。乙未冬日鷹之。